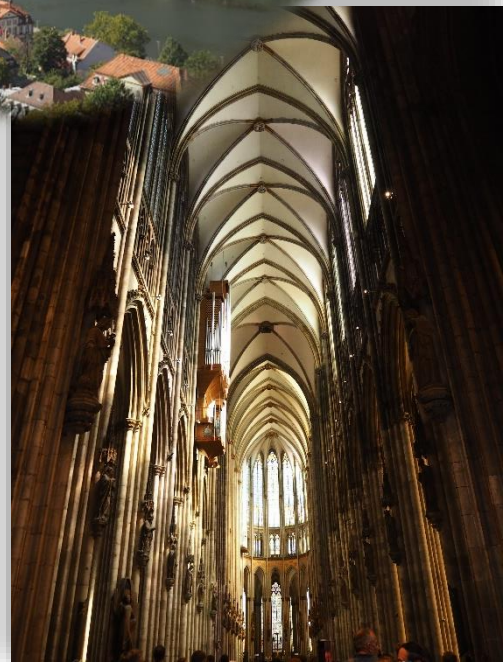
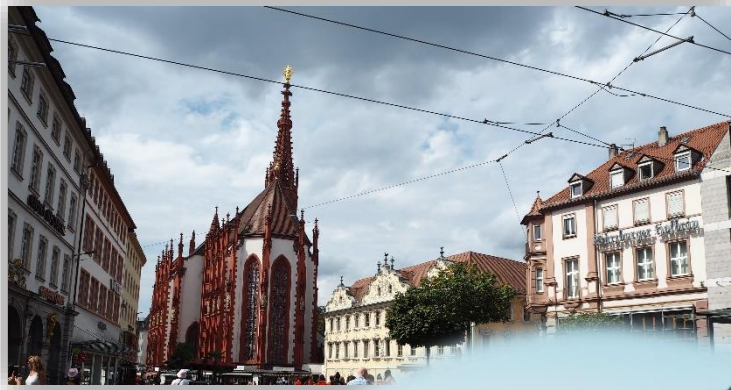


2019年度 研究旅行奨励制度報告書  
南ドイツにおけるゴシック建築、ネオゴシック建築

21AR123 福田明花



## はじめに

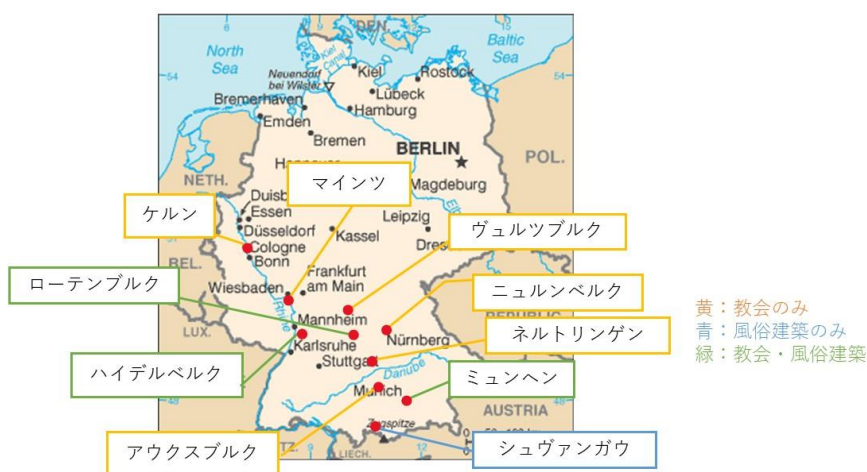
中世における教会ゴシック建築、近代においてゴシック・リヴァイヴァルの運動によって建てられたネオゴシック建築は、フランス、イギリスを中心に興隆した。しかし、世界最大のゴシック建築であるケルン大聖堂はドイツ(プロイセン)によって建立された。神聖ローマ帝国時代のあいだ 300 もの領邦に分裂していたドイツは、プロイセンの建国後も「ひとつの国」という意識は弱いままであった。プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム 4 世によって完成に至ったケルン大聖堂は、ドイツ人の国民意識をまとめる象徴として機能してきたのである。大聖堂は本来、教会としての機能とは別に、大聖堂の存する都市の象徴としての機能をもつものだが、ケルン大聖堂はこの機能の拡大ともいえる。今回の研究旅行のテーマとなる南ドイツのゴシック建築への関心の出発点は、このケルン大聖堂の事例からであった。

一方、世界的に有名な大聖堂ほど観光地化がすすんでいることは否定できない。ゴシック建築を表象として理解するには、都市の象徴としてのゴシック建築や、それぞれの都市の特徴や環境を知ることが不可欠だろう。

ゴシック式教会のみならず、近代のゴシック・リヴァイヴァルでは風俗的な空間にもゴシック様式が用いられるようになった。それはおもに人々の生活空間でありながら、今日において都市の象徴として強く機能しやすい城郭や市庁舎に多く取り入れられている。

本研究旅行では 10 日間という調査期間で南ドイツ 10 都市、計 16 の建築物を訪れた。現地で見つけたゴシックの建築物もあり、予定よりも多くの施設を見学することができた。しかし、すべてについて記述すると膨大な量になるため、なかでも特徴的かつ印象に残ったものをいくつか選定し、教会のゴシックと風俗的なゴシック建築からそれぞれ挙げることにする。とくに教会については建てられた時期が中世から近代と幅広く、建立年代ごとの差異にも着目して分析したい。

## 研究旅行地



## 研究旅行の目的

ゴシック建築は、12世紀後半から西ヨーロッパを中心に興隆した教会建築様式である。初期ゴシック建築や、代表的な建築物は主にイギリス、フランス圏に集中しているが、今回の研究旅行ではゴシック様式の流入が顕著な南ドイツの地域に的を絞った。

なぜドイツを選んだのか。ゴシック建築という名称はのちの時代に名付けられた名称であり、「ゴシック」とはドイツ地域に流入したゲルマン人「ゴート族の」という意味をもつ。そのため、中世においてゴシックはしばしば「ドイツ人の技法」と呼ばれた。また、18世紀～19世紀において起こったゴシック様式の再起、ゴシック・リヴァイヴアルの運動によって、建造中であったケルン大聖堂が完成した。

今回は、ケルン大聖堂のみならず、南ドイツに現存するゴシック建築を採用した建造物のゴシックとしての構造、またそれらが保存されている都市の環境を調査した。教会建築だけでなく、ゴシック・リヴァイヴアル以降、市庁舎・邸宅などの風俗的な空間にゴシック様式が取り入れられた建造物にも訪問した。それぞれの建築物を比較し、共通する点や各地の特徴についても以下で考察する。

現地での調査方法として、時間やスペースを確保できた場合は建築物のスケッチ、書店や教会でゴシック建築をあつかう文献の収集をおこなった。スケッチの際は、外装・内装の柱から梁、天井などの構造を中心に、門や柱にみられる細密な装飾はできる限り近い視点からそれらの特徴・配列を描画した。文献については、ゴシック建築、またゴシックについて言及のあるパンフレット、実用書、専門書などを、一般書店や教会などで入手することができた。

研究旅行実施日程

出発日	2019年 8月 29日	旅行日数
帰着日	2019年 9月 11日	14日間
	滞 在 地	行 動・調 査 内 容
第1日目 8月29日	日本発 フランクフルト空港 着	移動
第2日目 8月30日	フランクフルト	・ケルン大聖堂 見学
第3日目 8月31日	フランクフルト	・マイツ大聖堂 見学
第4日目 9月1日	フランクフルト	・ヴェルツブルク マリエンカペレ 見学
第5日目 9月2日	ローテンブルク	・ローテンブルク 聖ヤコブ教会、市庁舎 見学
第6日目 9月3日	ローテンブルク	・ネルトリンゲン 聖ゲオルグ教会 見学
第7日目 9月4日	ローテンブルク	・ハイデルベルク城、聖霊教会 見学
第8日目 9月5日	ミュンヘン	移動
第9日目 9月6日	ミュンヘン	・アウクスブルク大聖堂 見学 ・ミュンヘン フ라우エン教会、新市庁舎 見学 文献収集
第10日目 9月7日	ミュンヘン	・ニュルンベルク 聖ローレンツ教会、聖セルバドゥス教会、聖母教会 見学 ・レーゲンスブルク大聖堂 見学
第11日目 9月8日	ミュンヘン	・シュヴァンガウ ホーエンシュヴァンガウ城 見学
第12日目 9月9日	ミュンヘン空港発	移動 ミュンヘン空港→モスクワ シェレメーチエヴォ空港
第13日目 9月10日	モスクワ→仁川	移動 シェレメーチエヴォ空港→仁川空港
第14日目 9月11日	日本着	移動 仁川空港→福岡空港

## I. 教会のゴシック建築

まず、ゴシック様式教会を旅程の時系列にあわせて記述しよう。それぞれ建築物について形状や構造にも着目するが、すべてを同じ視点から考察するのではなく、とくに印象に残った点や教会そのものの特色を自由に挙げることにする。報告書という性質上、現地で感じたことや記憶を鮮明に伝えたい。さらに柱や尖塔アーチ、ステンドグラスや装飾といったゴシック様式の典型のみに着目したとしても、同じ様式であるために大きな差異を見出せず、ひとつひとつの教会の個性を損なってしまう可能性があるからだ。また便宜上、各節の題となっている目的地を本文中では「大聖堂」や「教会」等の略称で記すことにする。

### I.1. ケルン大聖堂

本研究旅行でも最初の目的地となったのが、このケルン大聖堂である。ケルン大聖堂についてはすでに序文と研究旅行の目的においても言及したが、いくつか詳細を補足しておこう。ケルン大聖堂の原型となる聖堂は 4 世紀に建てられており、818 年には同じ場所に 2 代目の大聖堂が建立した。しかしこれは 13 世紀半ばの火災により焼失してしまった。現在の大聖堂は 3 代目のすがたであり、1248 年に礎石が置かれ、15 世紀末までには内陣、南塔第 1 層部分と南側側廊、北側の天井七か所が作られた。1560 年の工事中断からは約 3



図 1:ケルン大聖堂のファサード(2019 年 8 月 30 日、筆者撮影)

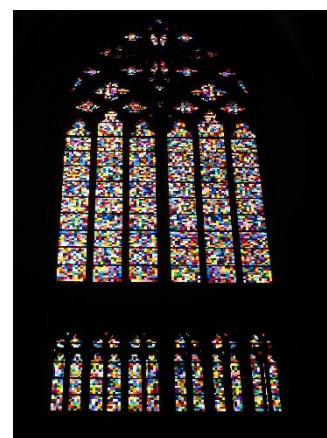


図 2:ゲルハルト・リヒターによるステンドグラス(同日、筆者撮影)

世紀の間工事が中断され、プロイセンによって 1880 年に完成に至った。しかし、——前章の言い換えにはなるが——ケルン大聖堂はこのプロテスタント国家によって建造がすすめられたカトリック教会といういびつな経緯をもち、それは国民意識の統一という大義名分にもとづいたものだった<sup>1</sup>。高さは 157m 奥行 144m、幅 88m に及ぶ。西側のファサードに向かうと、聖堂の敷地内が広場のようになっている。広場から大聖堂を見上げると、街の石畳と広場の境界に立ってもなお建物の輪郭をとらえられず、その規模の大きさを実感させられる。(図 1)

内部は 5 廊式のバシリカ型で、内陣には東方三賢人の聖遺物、放射状祭室にはそれぞれ大司教や諸侯などの墓碑銘が並んでいる。ステンドグラスは中世期からルネサンス、19 世紀のものと同様である。なかでも目を引くのがもっとも新しい南側側廊のステンドグラスだ。(図 2) これは 72 色もの吹きガラスを不規則に配置しているという。ケルンのアーティスト、ゲルハルト・リヒターによる鮮やかな市松模様のようなデザインは、ほかの聖書の物語や聖人が描かれたステンドグラスからは

<sup>1</sup> クリス・ブルックス『ゴシック・リヴァイヴァル』、鈴木博之・豊口真衣子訳、岩波書店、2003 年、261-262 頁参照。

逸脱している。一見すると機械的なのだが、窓からは赤色や黄色といった暖色のやわらかな光が降り注ぎ、ほかの見学者も足を止めていた。ここまで意図された作品かは不明だが、教会の神性とは対極にある人工的なものが神聖な空間を演出している点は逆説的で、光の美しさに心を奪われる一方、デザインの奇抜さには少々違和感をぬぐえない。



図3:内陣(東側)から見たケルン大聖堂(同日、筆者撮影)

東から大聖堂を望むと全く別の建物のように見える。(図3) これはバシリカ型がもつ丸みを帯びた内陣、側廊と翼廊をささえる南北の壁、ファサードによる普遍的な効果である。しかしケルン大聖堂においては本来の大きさに独特の黒さとフライング・バットレス、装飾の豊富な小尖塔といった構造が相まって地上からは大聖堂の全容を一度にとらえられない。複数の顔を持つこの建造物は1匹の巨大な怪物を錯覚させ、恐ろしくもある。ゴシック小説におけるホラーイメージともつながり得る。

ゴシック建築としてはスタンダードな形状をしているが、ひとつの教会としての神性はあまり感じられない。それは宗教的に複雑な立場であること、機械的なステンドグラスへの違和感、巨大生物のような恐ろしさという3点に起因するだろう。それぞれの要素から宗教的意義よりも象徴としての意義が強調され、ステレオタイプな教会のイメージを破り、ゴシック小説におけるホラーイメージとも繋がりと解釈できる。観光化による博物館や立ち並ぶ商業施設、広場などの併設もあいまって、ケルン大聖堂は純粋な宗教的空間からは遠のいた存在になっているともいえよう。

## 1.2. ローテンブルク・オブ・デア・タウバー 聖ヤコブ教会

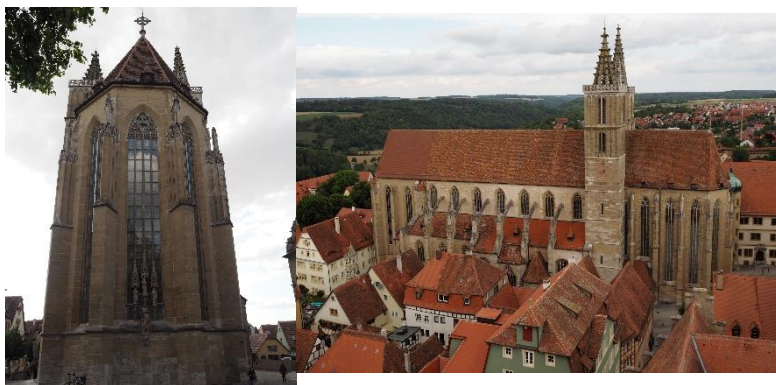
5日目に訪れたローテンブルク・オブ・デア・タウバー(以下ローテンブルク)は小さな城壁都市であり、壁の内側は13世紀のすがたをそのまま残している。街の景観を保つために厳しい建築条例が課され、建物の高さや屋根の色も制限されているようだ。調査期間はフランクフルト、ローテンブルク、ミュンヘンの3都市を拠点にしながら各地に赴いたが、この歴史ある都市が2つ目の拠点となった。(図4)



図4:マルクト広場から見たローテンブルクの街並み(2019年9月2日、筆者撮影)

聖ヤコブ教会は城壁の中心となるマルクト広場からほど近いローテンブルクの主教会である。1311年に起工し、1484年と完成までに約170年という長い歳月をかけて作られた。前節のケルン大聖堂と比較すると短期間にも思えるかもしれないが、1つの教会としては大規模な製作期間といえる。年代としては中世ゴシック様式の本盛期に建設されたもので、広い窓、控え壁、フライング・バットレスに尖塔アーチ、これらの基本

的なゴシック様式の特徴が採用されている。一方装飾はいたって少なく、外陣側の控え壁に施された聖人の彫刻、小尖塔、トレーサリーという幾何学模様のような窓枠、内陣側の窓中央のゴシック



左上 図 5: 聖ヤコブ教会、内陣側 右上 図 6: 南からみた聖ヤコブ教会 (同日、筆者撮影)

左下 図 7: 同教会身廊 右下 図 8: リーメンシュナイダーによる『聖血祭壇』(ヴォルフガング・コーツ『ローテンブルク』、Kraft Premium GmbH、2017年、25～26頁。)



彫刻といった数種類が点在しているほどである。本教会は 1544 年に宗教改革を受け入れプロテスタントの教会となっているが、福音派教会として早くから受け入れられたのもこの構造のシンプルさゆえかもしれない。

教会の外観は南塔と北塔からなる 2 本の尖塔、大きくとられた内陣、城壁内のすべての建物で統一されている赤みがかった瓦屋根が印象的だ。街の象徴でありながらも周囲の風景から逸脱することなく、マルクト広場の少し北にひっそりと佇む様子から画一化されたローテンブルクの建築物らしさをうかがえる。(図 5, 6)

内部は外観同様、骨組みである柱や交差リブ・ヴォールトの装飾は抑えられているが、祭壇画や彫像といったゴシック式の教会芸術品が数多く見られた。(図 7) 教会内

西側の 2 階には『聖血祭壇』と名付けられたヴェルツブルクの大彫刻家、ティルマン・リーメンシュナイダーの作品があり、上部中央の十字架にキリストの血が入ったカプセルが祀られている。ゴシック建築の場合は、細くまっすぐな柱とその高さによって人々に神の国へ上昇してゆくかのような錯覚をあたえるが、『聖血祭壇』は自生している木よりもなめらかな曲線美をもってアーチや尖塔で作品を縁取る。さらに蔓が天を目指すようにうねり、ゴシック特有の上昇感も忘れさせない。この点には芸術品としてのすばらしさと、様式とリーメンシュナイダー自身の技法の取り入れ方に驚かされた。(図 8)

聖ヤコブ教会の特色は、内部の芸術品はゴシックに、外観はゴシック様式を採用しつつ街に溶

け込んでいる点にあるだろう。ゴシックとローテンブルク、それぞれが持つ規範に寄り添うことで洗練されたデザインと美しい街をつくりだしている。

### 1.3. ハイデルベルク 聖霊教会

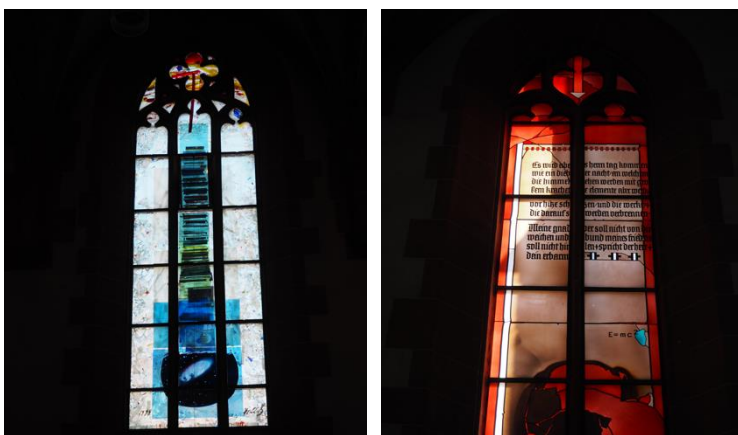
ハイデルベルクは風俗的空間に見られるゴシック建築の例であるハイデルベルク城や、ドイツ最古のハイデルベルク大学の名で有名な都市でもある。当初はハイデルベルク城の見学のみを予定していたが、城から街を見下ろしたとき、ゴシック様式らしき尖塔が目にとまったのでこちらにも立ち寄ることにした。聖霊教会もハイデルベルクのマルクト広場の中央に面した位置に建てられているが、ローテンブルクの例よりも広場においてランドマークとして機能しているように感じた。これは



図 9: 聖霊教会 (2019 年 9 月 4 日、筆者撮影)

立地的な問題だけではない。教会の壁面にはテント屋根が張られ、なんと教会の周囲がお土産ものや子供向けのおもちゃ、お菓子などが並ぶマーケットとして利用されていた。聖ヤコブ教会や 3 つものゴシック教会がみられたニュルンベルクなどは、写真撮影などの制限が厳しく、遺産としての価値に保守的な地域多いなか、ここまでオープンに教会が使用される例は他にないほどだ。教会の周囲を行き交う人々も学生や家族連れ、個人の観光客など様々な人にあふれ、平日でありながらも活気に満ちていた。(図 9)

聖霊教会は上述した聖ヤコブ教会同様、1398 年にゴシック様式の教会として創設され、現在は福音主義教会の礼拝堂として使用されている。しかしその経緯は少々複雑で、1706 年から 1936 年までローマ・カトリック教会と福音主義教会が身廊の外陣側と内陣側で壁を仕切り共同で使用していたという。福音主義の教会となってから壁が取り払われ現在の内観が完成したため、内部装飾もあたらしいものが多くみられる。たとえばステンドグラスやオルガンなどは 1980~2000 年代に設置されているものもある。外陣側のステンドグラスは人の顔や銀河の写真を使用しながら抽象画のような色づかいで構成されていたり、溶けかけたガラスの破片をちりばめ氷の



左 図 10: Hella Santarossa “The spirit of God and the wisdom of mankind”, 2014 年。

右 図 11: Johannes Schreiter, 1984 年。(同日、筆者撮影)



膜のような質感をだしていたりとケルン大聖堂のゲルハルト・リヒターによるステンドグラスとはまた異なる現代ならではの作品が並ぶ。“The spirit of God and the wisdom of mankind”という題がつけられたもの(図 10)、「6.8. 1945」という広島原爆投下の日付がきざまれた作品(図 11)など、現代史的なものがテーマとなっていた。ステンドグラスは古いものの大半が聖人の人生や信者を教化するため聖書の逸話を絵画的に表しているのに対し、本教会のステンドグラスは人間的な主題をあつかう姿勢が革新的である。だがこれらは決して教会の美しさを損なわせるものではなく、15 世紀に描かれた天使や葉の模様の天井画(図 12)、赤い柱やヴォールトが作り出す内部の明るさに色を添える存在となっていた。

外観は内観の骨組みと同じ赤い壁に、ウサギ、犬、魚のような動物のガーゴイル、外側の壁にも聖母子像の壁画が描かれている点が特徴的だ。そして聖霊教会の尖塔はひとつで、尖塔は風見鶏と真っ赤な時計という市庁舎を思わせる風貌をしている。(図 13)

マルクト広場の中心に面した立地、壁に沿ったマーケット、街の活気、教会の歴史や古い遺産と現代の作品の共存、これらの点から聖霊教会は本研究旅行で巡った教会の中で、もっとも人々の生活圏に近く、風俗的にも感じた。しかしこの教会は取り巻く環境や時代にあわせ移ろい、開放的な空気と活気に順応することで現在の姿があるのではないか。聖霊教会もハイデルベルクという街に寄り添いつづけた産物といえるだろう。



上 図 12: 中世の天井画

下 図 13: 控え壁のガーゴイル、尖塔の時計  
(同日、筆者撮影)

ここまで、ケルン大聖堂、聖ヤコブ教会、聖霊教会という3つのゴシック教会をみてきた。ケルン大聖堂は街の枠を超えドイツ全体のシンボルとして存在しているために、街によって教会の個性が確立するのではなく、大聖堂が完成したことでドイツの国民意識の土壌が築かれた。つまりローテンブルク、ハイデルベルクの教会のように、その街の制度や環境に対応したすがたが生じてゆくという考察と逆転した図式を持つ。そのためドイツの歴史の一端としてケルン大聖堂は注視すべき存在であるが、南ドイツの各都市に点在するゴシックの教会とは一括りにできないだろう。圧倒的な高さときさまざまな装飾、複雑な骨組みをもつゴシック様式であっても、周囲から突出することで街のシンボルとなり得るのではない。教会は、地域の空気を取り入れ、ゴシック様式と融合させることで都市を象徴する存在となるのだ。

## II. 風俗空間のゴシック建築

風俗空間におけるゴシック建築として本研究旅行で訪れたのは、ローテンブルクの市庁舎、ハイデルベルク城、ミュンヘンの新市庁舎、そしてホーエンシュヴァンガウ城の 4 件である。ゴシック様式をとり入れた風俗建築としての例は、市庁舎と城塞という 2 種類の建造物にかぎられる。また風俗空間のゴシック建築では、建築物にどの程度ゴシック様式がとりいれられているか、というのもそれぞれの建物によって大きく異なる。そのため今回は、市庁舎の事例と城塞の事例という 2 点から考察してみよう。

### II.1. 市庁舎



図 14: ローテンブルク旧市庁舎  
(2019 年 9 月 2 日、筆者撮影)

教会においても考察したローテンブルクだが、マルクト広場の西側に位置する茶色と白い建物の 2 棟から成るのが市庁舎である。(図 14) 1250 年頃は 2 棟の両方がゴシック様式であったが、1501 年の火災以降、東側はルネサンス様式で増築されたそうだ。この増築部分が現市庁舎となっており、ゴシック様式が取り入れられているのは西側の白い旧市庁舎部分である。一見べつの建物にしか見えず、旧市庁舎の鐘塔にのぼるには現市庁舎の入口から入る必要があるので、観光客を迷わせていた。この鐘塔が特徴的な旧市庁舎のファサードは、壁は周囲の建物のように平坦だが、屋根沿いには中央の鐘塔を導くように小尖塔がならんでいる。トレーサリー風のくぼみ、鐘塔のドーム状の屋根の棘のような装飾もゴシック様式の試みのようだが、この建造物がゴシック様式だと言われなければ気づかないかもしれない。これは、13 世紀というまだゴシックが教会建築の域をほとんど出ていなかった時期

に市庁舎という場にゴシックが採用されている貴重な例であり、それゆえ旧市庁舎が当時の一般的な建築物にあわせた形状であるためだろう。

一方、ミュンヘンの新市庁舎はマリエン広場に面した完全なネオゴシック建築で、1867 年～1909 年に建てられた。(図 15、16) まるで広場ごと大きなショッピングモールのようにさまざまなお店が軒を連ねるマリエン広場の一面をすべて覆うほどの大きさと、グロッケンシュピールというドイツ最大の仕掛け時計のために、新市庁舎前は人々で埋め尽くされていた。休日の夕方という状況を想定できていなかったため、新市庁舎の内観を見学することはかなわず、外観のみの見学となった。新市庁舎には数え切れないほどの小尖塔や葉型の装飾、ガーゴイルがとりつけられ、ゴシック・リヴァイヴァルの建築のなかでも教会ゴシックに見られる特性を多用しているものの典型といえる。市庁舎の裏側と中庭側も、マリエン広場側ほどではないものの張り出し部やベランダまでゴシックの装飾がなされている。内部にはレストランなども併設している。

市庁舎はいわばその都市の政治的な象徴となる場である。そのため教会とおなじく街の中心地に面していることは珍しくない。また、ローテンプルクという小さな城壁都市とミュンヘンという国の交通の要となる大都市の市庁舎をみると、市庁舎の規模とその外観は都市の大きさに比例しているようにも思える。



左 図 15:ミュンヘン  
新市庁舎  
右 図 16:図 15 右側  
下部の装飾  
(2019 年 9 月 6 日、  
筆者撮影)

## II. 2. 城郭

13 世紀頃にプファルツ選帝侯の居城として建設されたハイデルベルク城も、中世のゴシック様式が城塞のデザインに取り入れられた例のひとつだ。しかし、ハイデルベルク城は代々の城主による拡張や改築、30 年戦争とプファルツ継承戦争の戦火による破壊と再建をくりかえしてきた。そのため城の正式な創立時期は不明で、戦争で破壊されたのち今日まで廃墟のまま残された部分もある。城内はいくつもの棟で構成され、ロマネスク、ゴシック、ルネサンス、バロックといった西洋の中世から近世にかけてのさまざまな時代の様式が混在



図 17:ハイデルベルク城中庭  
(2019 年 9 月 4 日、筆者撮影)

している。(図 17)ここでは、上述した聖霊教会の見学、日本語のガイドツアーの時間指定があったため通常の入場券で見学できるエリアを散策した。現存するゴシックの遺構は中庭にみられた。中庭の中央から南西にある図書館棟には張り出し部にゴシック式のトレーサリーが用いられ(図 18)、一般の見学者は登れないが内側から見ると張り出し部の天井はリブ・ヴォールトになっている。井戸棟は現在四方にベンチが置かれ、休憩所として使われていたが天井はリブ・ヴォールト、柱はロマネスク様式でつくられていた。(図 19)中庭でもっとも目立つフリードリヒ館の隣、ガラスの広間棟はかつて後期ゴシック様式が取り入れられていたそうだが、1764 年の落雷で全焼してしまったそう



左 図 18: 図書館棟と張り出し部 右 図 19: 井戸棟  
(同日、筆者撮影)

ホーエンシュヴァンガウ城はノイシュヴァンシュタイン城の城主ルートヴィヒ 2 世の父、マクシミリアン 2 世によって中世の荒廃した城跡の再建によって生まれたネオゴシック様式の城塞である。しかし前節のネオゴシック建築、ミュンヘンの新市庁舎とは大きく異なり、教会建築の特徴をふんだんに使用したデザインではない。外観はもとの中世の城塞をもとにベランダや窓枠、張り出し部の格子といった装飾部分、内部はヴォールト風の天井装飾においてゴシックのトレーサリーと葉っぱ模様のみが用いられている。(図 20、21)城内の壁画や絵画はロマン主義のものが多く、1833 年から 1837 年にかけて改修されたホーエンシュヴァンガウ城がネオゴシック建築とされているのは他にも理由がある。

シュヴァンガウという高原地帯は、人里から離れ、木々や湖、溪谷という自然の産物に恵まれている。この場所にそびえるホーエンシュヴァンガウ城はさながら風景画のようであった。(図 22)この景観は、17～18 世紀のゴシック・リヴァイヴァルにおける風景式庭園の流行と<sup>2</sup>、風景になじみ、想像力を喚起させる建築こそ魅力的であるという美的概念、ピクチャレスク<sup>3</sup>と合致するように思える。風景式庭園の造園では、自然全体を庭としてとらえ、風景のなかにゴシック建築や、廃墟を人の手であつらえることが流行した。それには、建築物によってその場所の歴史や感傷を人々に想起させるというねらいがあった。ハイデルベルク城は、意図して作られた廃墟でなく本物の歴史を持ち、破壊された跡が戦火の激しさを想像させる。風景式庭園の中で求められた建築の理想形といえよう。



上 図 20: ホーエンシュヴァンガウ城外観(2019 年 9 月 8 日、筆者撮影)

下 図 21: Schwanrittersaal  
(Gisela Haasen“SCHLOSS HOHENSCHWANGAU”, Hirmer Verlag GmbH, 2013, p 37. )

<sup>2</sup> クリス・ブルックス『ゴシック・リヴァイヴァル』、鈴木博之・豊口真衣子、岩波書店、2003 年、58 頁参照。

<sup>3</sup> 上掲書、93 頁参照。

風俗空間の建築は、人々の日常生活のなかで使用されるため、用途に合わせた多くの空間や仕切られた部屋が必要になる。そのため教会ゴシックのような高い天井も、細長い柱も排除されるが、それらの形状を模倣することでゴシックの装飾をつくりだしていた。それは、ゴシック様式の機能性



図 22: ノイシュヴァンシュタイン城からみたホーエンシュヴァンガウ城  
(同日、筆者撮影)

の喪失という見方もできるかもしれない。なぜなら装飾を取り払ったとしても、最低限市庁舎や城郭としての使用に差し支えないのである。しかし、そのような何の変哲もない建物にしてしまえば、私たちはそれらに何の関心ももたず、何かを想起することもなく通り過ぎてしまうだろう。たとえ教会ゴシックの空間がもつ神性が、風俗建築のゴシックでは損なわれたとしても、それはもとより大きな問題ではないのである。風俗建築をより美しく、堂々たるものに演出し、歴史や文化の豊かさを想像させる都市のシンボルへと仕立てるためにこそ、ゴシックは風俗的空間においても採用されているのではないか。

## おわりに

本報告書では、3つの教会と4つの風俗建築に焦点を当て、それぞれの建築物の特徴を考察することで、建設された都市とどのように対応しているか、どのような象徴として存在しているのかを探ることができた。

聖ヤコブ教会と聖霊教会と比較することで、教会は街の写し鏡のように現れていることがわかった。このひとつの答えがケルン大聖堂には適応し得ない点から、大聖堂の歴史上での特異な位置づけにも納得を得ることができた。今回訪問した教会は、それぞれの街で主教会であるものが多く、街の中心地や広場に面しているか、その傍らに位置していた。マリエンカペレや聖ゲオルク教会、マインツ大聖堂などの前では飲食店のテラスやマーケットの出店もみられ、ハイデルベルクの聖霊教会のような活気も感じられた。むしろ、聖ヤコブ教会ほど中心地の傍らにありながら、静かなたらずまいを保っている例の方が貴重であった。

また4か所のゴシックの風俗建築を訪れ、市庁舎・城郭ともに1件ずつ中世ゴシックとネオゴシックの建造物をバランスよくみることができた。本報告書で度々くりかえしてきた「象徴」や「ランドマーク」というフレーズは現地でそれぞれの建築の壮大さを感じ、その土地を歩いた実感から発された言葉といえる。

現地での文献収集としては、書店での購入よりも、各施設の有償のパンフレットや解説書が多く手に入った。マリエン広場に建つミュンヘンで最も大きな書店や、大学近くの学生向けの書店でもゴシック建築をメインに扱う文献はあまり発見できなかった。各施設のパンフレットは易しい説明が

多いものの、建築物の見取り図や撮影できない箇所の資料など貴重なデータを多く入手できた。

今回、各建造物の特性と南ドイツにおけるゴシック教会のありかたを捉えることができたが、風俗空間のゴシックに共通性を見出すには至らなかった。これを達成するには市庁舎・城郭ともにより多くのデータをあつめる必要があるだろう。そして本研究旅行の反省点として、1日1～2都市というハイペースな旅程や人の多さ、ガイドツアーのため内部をゆっくり見学できなかったところもあり、本来主な調査方法としたスケッチにあまり時間を当てられなかったことがあげられる。見学の日時によってその場から受ける印象も左右されるように思えた。そのため、さらに目的地を絞り、見学の時間帯や日付による差異があまりでないよう設定し、1つの建造物に余裕ができるほどの時間を割くことでよりよい分析が可能になるだろう。

#### 参考文献

B. ショック・ヴェルナー 『ケルン大聖堂——宝庫を含む写真案内書』、RAHMEL-VERLAG GmbH, O.J.。

ヴォルフガング・コーツ 『ローテンブルク』、Kraft Premium GmbH、2017年。

「礼拝のしおり 聖ヤコブ教会 ローテンブルク・オブ・デア・タウバー」、現地パンフレット。

クリス・ブルックス 『ゴシック・リヴァイヴァル』、鈴木博之・豊口真衣訳子、岩波書店、2003年。

Gisela Haasen, „SCHLOSS HOHENSCHWANGAU“, Hirmer Verlag GmbH, 2013.

“THE HOLY SPIRIT CHURCH HEIDELBERG”, 現地パンフレット。

Achim Wendt, G. Ulrich Großmann, „Schloss Heidelberg“, Verlag Schnell & Steiner GmbH, 2015.